



新たな展開への期待

横須賀水交會会長 土井克彦



横須賀水交會も平成13年4月1日の発足後15年目と言う節目の年を迎えることとなりました。私事で恐縮ですが私の本会への入会時期が平成13年の夏でしたので、奇しくも横須賀水交會の歴史そのものを身を以って体験して来た会員の一人であるとして自負しております。そこで一度自分なりの解釈でその歴史を振り返り、今後の本会の進むべき方向性を私見として取り纏め、会員の皆様の参考に供したいとの思いから筆を執ることとしました。

この情勢変化の激しい中15年と言う歳月の流れは決して短いものではありません。

横須賀水交會も又様々な時代背景に揉まれながら紆余曲折を経て現在に至っておりますが、私自身は本会のこれ迄の発展経過を、草創期からの「基盤構築から安定期へ」、その後の「現状打破から拡大期へ」、そして現在の「歴史を土台に新たな展開期へ」と3区分でできるのではないかと見ております。

・「基盤構築から安定期へ」
ご承知の通り「横須賀水交會」は平成13年、戦後再興された旧海軍の流れを汲む「水交會」と海上自衛隊OBで構成された「海上桜美会」の合同に伴い発足したものであります。

(旧海軍出身者親睦団体「横須賀海交會」も併せて合同)
発足当時の本会は、海自OBと言えども旧海軍経験者の方々がその主力を占め、どちらかと言えば旧海軍

発行 平成27年4月13日
編集 横須賀水交會事務局

の色合いが強かったように記憶しております。このため慰霊顕彰と親睦に力点が置かれ、その中で海上自衛隊への協力支援の絵姿をどう描くかが大きな課題でありました。当時米ソ冷戦構造が崩壊し徐々に国際情勢の流動化が見られる時期ではありましたが、まだまだ米国の力は強大でその絶対的庇護下で我が国の安全保障政策が構築されていたことから、海上自衛隊も内向き指向で所謂トレーニング・フォースの域を出ない状況にありました。これらの時代背景を受け本会の活動は“親睦”と“海自への精神的支援”が中心となり、現在の活動形態の基礎が築かれたものと考えられます。

この状況の継続は本会に一種の安定感を齎したものの、内向き指向と自己満足の雰囲気醸成する弊害も生み、徐々にではありましたが本会活動に対する閉塞感・危機感を感じに至っております。それは政治的な国内情勢の混迷と決して無縁ではなかったように思われます。

横須賀水交會主要行事予定

平成27年10月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交會ホームページ(<http://y-saikokukai.daa.jp/>)で御確認下さい。

- 1 練習艦隊入港歓迎行事
(1) 期日 5月8日(金)
(2) 場所 逸見岸壁
- 2 馬門山海軍墓地墓前祭
(1) 期日 5月9日(土)
(2) 場所 馬門山海軍墓地
- 3 海軍の碑記念行事
(1) 期日 5月27日(水)
(2) 場所 ヴェルニー公園
- 4 27年度総会・講演会・懇親会
(1) 期日 6月5日(金)
(2) 場所 よこすか平安閣
- 5 靖国神社月例参拝
(1) 期日 6月18日(木)
(2) 場所 靖国神社
- 6 第30回ゴルフコンペ
期日及び場所 未定
- 7 横須賀夏期防衛講座
(1) 期日 7月25日(土)
(2) 場所 記念艦「三笠」(予定)

・「現状打破から拡大期へ」
その閉塞感打破のため本会が取り組んだのが“政治的活動への関与策”でありました。

サイレント・ネービーを旨としまず水交會に携って政治的活動への関与は永く禁じ手の一つでした。その一步を踏み出すには本部の意向も巻き込んで一波乱も二波瀾も有りまして、混乱する政治情勢下で本会の姿勢を明確化して行くことは焦眉の急との認識から、極めて“抑制的な形態での政治活動への参画”の採用に踏み切りました。

それは本会そのものでは無く本会所属の有志会員が国政・地方を問わず我が国の安全保障政策別けても海上自衛隊が担います“海の護り”に理解を示す政治家の選挙支援に当たることでした。そして横須賀地区に在る他の防衛諸団体の有志を糾合し「三浦半島地区防衛諸団体連絡協議会(防連協)」を組織し、それに本会有志会員が参画する形態での選挙支援活動への取り組みが始まりました。この種活動は、地域において対外的にも海上自衛隊に対しても「横須賀水交會」と言う組織を目に見える

形でアピールする場が得られただけで無く、首長始め地域選出の国会議員・県議・市議の政治家更には市役所や商工会議所等の諸機関と本会との距離感を縮め、結果的に本会の地域におけるステータスを大いに高める効果を生みました。

そのことは本会が主催する各種イベントへの参加者の顔触れが多士済々となつて来たことから十分伺え、本会が選択した抑制的政治活動への関与策は間違いなく本会の再活性化に大きく貢献することとなりました。そして本会はこのことを糧として一般有志を対象とする会勢拡大に乗り出した訳です。

それ迄の横須賀水交會会員はほぼ旧海軍出身者と海自OBで構成されており、それを当然として受け取っておりました。このため外界への働き掛けが限定的で外から見ると極めて閉鎖的な団体との印象を与えていたように思われます。これを払拭するため民間に在る隠れ海上自衛隊ファンを発掘する所謂一般有志会員獲得強化策を打ち出しました。それは本会入会への門戸を開くことで、それ迄の“同じ釜の飯を食った仲間同

士”という強いようで弱い身内意識を脱し、外から新しい血を入れることによる組織としての強靱さを身に着ける狙いが有ったことに外なりません。無論新たな血が汚染されたものであつてはなりませんので、そこは勧誘に当たった会員の矜持に委ねた訳ですが、この会勢拡大策は見事に当たり、ここ数年で700名弱の会員数を900名近くに増やすことに繋がりました。

・「歴史を土台に新たな展開期へ」
しかし一般有志会員の目は極めて厳しいことも再認識させられました。それは一度彼らの期待に応えられなかった場合潮が引く如く洩む危険性を内在しており、それを防ぐためには本会活動の質を更に高めて行く努力を怠つてはならないとの警告でありました。

会勢拡大は目的ではありません！問題は“会勢を拡大した横須賀水交會が何を成すか！”に有った訳です。現在の自民党安倍政権の目指す安全保障政策の方向性は妥当で、経済政策面でも一見安定した政権運営が成されているように見受けられますが、国際情勢の流動化・不安定化別けて

も中国の台頭と米国の相対的力の衰退は我が国の安全保障環境に深刻な影響を及ぼしております。その中で海上自衛隊の果たすべき役割は嫌が上にも増大し、これ迄のトレーニン
グ・フォースからアクチャル・フォースへの質的転換を迫られております。しかしながらその実情は人的・経済的制約下での極めて過酷な働きを強いる状況を招来させており、隊員の精神的ストレス(負担)の増大は予想に難くありません。

そこで本会では現在、これ迄の“精神的支援策”に留まらず、“隊員に寄り添える新たな支援策”を模索しております。それは前述の隊員の精神的負担を少しでも和らげることができ、その目を指そうとするもので、隊員が“目に見え肌で感ずる”ことのできる具体策を希求しております。しかしながら本会はこの種領域での支援活動を行った経験が無く、一朝一夕にその具体策を案出できません。そこでこれ迄本会が培つて来た“同じ釜の飯を食った仲間意識”や“抑制的政治活動の成果”、そして“会勢拡大の活用”と言う歴史的産物を総

動員して海上自衛隊への支援の在り方を求めるアプローチを掛けております。少々大袈裟かも知れませんが“横須賀水交會の鼎の軽重を問われる正念場”との認識に立ち取り組んでいる訳です。

その第一弾が現在発足準備を進めております「隊員留守家族支援策(フアミリーサポートセンター)設立構想」に外なりません。その詳細はこれ迄も本紙面をお借りして縷々述べて来ておりますのでここでは割愛しますが、本支援策の最大の狙いは現役隊員の方々が後顧の憂い無く任務に邁進できる環境を整える一助になることにあります。

本来この種案件は国レベルで対処すべきものと考えられ、政治家の方々にも働き掛けてはおりますが今直ぐ事が運ぶことは期待できません。しかし隊員は待った無し状況に置かれており、そこを本会の活動で補助とするものであります。今次活動は水交會本部或いは海幕においても注視され、その実績を見て全国展開を図る意向が有るとも聞いておりますので、しっかりと地に足の着いた企画推進を図る所存であります。

少々冗長となりましたが、これからの本会の活動は今次施策を皮切りに“隊員に寄り添える支援の在り方”を打ち出すことが肝要と考えている次第です。

以上、私なりの見方で15年目を迎える横須賀水交會の歴史を足早に俯瞰して参りましたが、これが本会の正史などとは努々思つてはおりません。本会の正史は会員それぞれが持ちの歴史感で有り、それが本会を支える原動力になっているものと考えております。これから紡ぐ本会の歴史も又その延長線上に有るものと確信しております。

私は6月初旬の総会をもって会長職を退くこととなりますが、今後の横須賀水交會の発展に露ほどの疑問も持つておりません。本会は相も変らぬ貧乏所帯ではあります但豊かな人材の宝庫でもあり、それが本会の最大の強みとなっております。間違ひ無く横須賀水交會は将来とも見事な発展を遂げるものと確信して会長職を退きます。今後は一会員に戻り、心新たに横須賀水交會活動に貢献して行きたいと考えております。そして“貴方は水交會員ですか?”と問

われたら“否！私は横須賀水交會員です！”と答え続けて参ります。永い間のご指導ご鞭撻に深甚の謝意を表し、会長としての本紙への最後の寄稿文の筆を置きます。ありがとうございました！

「総監挨拶」

横須賀地方総監

海将 井上 力



昨年10月14日付で第43代横須賀地方総監を拝命致しました井上でございます。横須賀勤務は、自衛艦隊司令部幕僚長以来約3年ぶり、8回目となります。昭和51年、防衛大学

校入校以来、長い時間を横須賀で過ごしてきましたが、そのほとんどが実動部隊での勤務であったため、横須賀の街並みをゆっくりと楽しんだ記憶はあまりありません。横須賀地方総監に着任してからは、地元の

方々や協力団体の皆様と交流を深める中で、今まで知りえなかった横須賀の風土、文化そして歴史に触れる機会を多く頂き、その都度感慨を新たにしています。

前職は舞鶴地方総監で、地方総監として2度目の勤務となりますが、横須賀は舞鶴と比べると、人員も予算も約3倍、また、岩手から三重までの1都15県を担当警備区とし、砕氷艦しらせによる南極観測支援、海外派遣部隊の後方支援といった他総監部にはない特殊な任務や、在日米海軍との良好な関係の維持、南海トラフ地震に対する備え等、その任務は極めて多岐にわたります。私にとりまして、現職は身に余る重責ではあります。が、「即応」、「基本の徹底」を指導方針とし、諸先輩方が築いてこられた良き伝統を継承して、職務に邁進する所存です。

海上自衛隊は、平成19年の組織改編によって部隊運用を自衛艦隊に集中し、艦艇、航空部隊の指揮を自衛艦隊司令官に一元化しました。これにより、地方隊には多用途支援艦や掃海艇などの少数の小型艦艇が所属するのみとなり、我々に期待される

任務は、艦艇部隊への後方支援と大規模震災への備えが中心となりました。一方で、急速に進行する少子高齢化に対応した優秀な新入隊員の確保や、常態化する海外派遣部隊の留守家族支援、緊急登庁時の家族支援など、新たな役割も求められています。こうした情勢に対応すべく、横須賀地方隊では、移動募集広報の実施や家族相談室の設置、省内託児所（田浦このはな保育園）の設置等、時代の変化に応じた積極的な取り組みを実施しております。水交會の皆様には、緊急登庁時における隊員家族の一時預かりをお願いし、現在、実現に向けた各種準備作業を進めていただいていることに、大変感謝しております。これは、海上自衛隊創設以来の取り組みであり、まだまだ手探りの状態ではありますが、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

す。海上自衛隊では、秋に観艦式を計画しているほか、関連して実施される様々なイベントと合わせ、積極的にこれらの行事に参画することにより、地元の方々との交流をさらに深め、地域の発展に貢献したいと考えています。

厳しい国際情勢が継続する中、周辺海域における警戒監視やソマリア沖・アデン湾における海賊対処活動など、海上自衛隊の任務は多様化しております。このような状況の中、隊員たちが昼夜を問わず任務に邁進し、訓練に打ち込むためには、横須賀水交會をはじめとする地域の方々のご理解・ご支援が不可欠であると考えております。皆様には、引き続き、海上自衛隊にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

【投稿】「努力」

会員 佐野 恭子



来る5月27日海軍記念日に三笠は日本海海戦110周年記念式典を行う。三笠保存会増田信行会長が昨年、心をこめて読み上げた式辞から一部を引用する。歴史を振り返る指針の一つと思う。

「18世紀の産業革命以来、列強は強大な軍事力を背景に植民地を求め19世紀になると東南アジアに矛先を向け、アヘン戦争に敗れた清国からは租借地などを獲得しました。当時の列強が支配した植民地は実に世界の約8割強であり、まさにこの弱肉強食の時代に、日本というまことに小さな国が、明治と言う開化期を迎えたことになりました。ロシアは、北東アジアに版図を広げ、このままでは、清国と同じ運命を辿るとの危機感を抱いた日本は、わが国の主権を守るため大ロシアと戦う決断をしたのであります。まさに自存自衛の防衛戦争でありました。帝政ロシアは日本の10倍の国家予算と軍事力を持つ大国でしたが、わが国は、国民一人一人がそれぞれの分野で死力を尽くし、大きな負担に耐え、文字どおり挙国一致で日露戦争を戦い抜きました。日本陸軍は世界最強と言わ

れたロシア陸軍と戦い、苦戦の末、旅順を落としロシア艦隊を壊滅させ、奉天会戦で勝利をおさめ、更に、明治38年5月27日東郷司令長官率いる日本の連合艦隊は、将兵の極めて高い士気と、練りに練られた巧みな作戦・用兵でバルチック艦隊を撃滅し世界の海戦史上例を見ない大勝利を収めたのであります。ルーズベルト大統領の仲介でポーツマス講和条約が締結され、日露戦争は勝利のうち終結いたしました。日本が大国ロシアに勝利した事が、抑圧されていたアジア諸国などの多くの人に独立国家建設の機運をもたらし、その後それらの国が独立を勝ち取った事は歴史の示す通りであります。「三笠」の雄姿を眺める度に、明治の人の気概と勇気、そして国家に対する熱い思いを感じざるを得ません。戦後、わが国は、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、安全と生存を保持しようとして決意し、防衛を他国に委ね、急速な経済復興を成し遂げ経済大国になりました。しかしそれは可能とした環境も揺らぎ始め、日本は今やかたつてない至難の時代を迎えようとしております。

昭和33年11月、三笠保存会設立總會において、小泉信三先生は次のような講話をされております。『自尊心の精神のない国民が、他国の人の侮りを受けるのは当然であり、自らを重んずる精神のないものは、弱小のものに対しては不遜となり、強大なものに対して卑屈になることは避け難いことでもあります。他国の武力に屈するのやむなきに至った日本人は国民としての誇りを失い、心の支えを失って、退廃に陥りました。道徳的努力を無意味なものとして嘲る思想、ひたすら官能の満足を追求める傾向、さらに、何者かに媚びる気持ちから、しきりに日本及び日本人を侮り嘲る風潮が生じております。』50年以上も前の話ですが、我が国の現状を見ますと、政治を始め、教育、マスコミなど小泉先生が懸念された状態が未だ続いており、日本人として誇りも矜持もない人が多く見られることは極めて残念であります。この記念艦「三笠」が、今後とも国民に広く親しまれ、多くの方、特に日本の将来を担う青少年にとって、その発奮の一助となる事を願って止みません。・・・

私は今年、三笠を知って貰おうと三笠のカレンダーを日米協会会長や新聞編集委員など数人に6部ずつ送った。電話をすると「あ、有り難うございます。」と何の躊躇もなく喜ばれた。親しい友人達に3部4部と贈ると自分の所には残さずに実家や友人に送ってしまった。三笠のカレンダーなら何の下心もなく喜んで受け取って貰えるか、心理実験をしたようなものだ。戦後70年、ニミッツ提督や小泉信三のような方々だけでなく、黙々と三笠を守って来た大勢の無名の人々の長い期間に亘る努力の結晶が「三笠の今日の社会における名誉ある地位」だと思う。私は、最初三笠を博物館のように考えていたが、違う。三笠は一つの純粹な、極めて純度の高いなにかの象徴・・・余程の尊敬と好意を持たれている象徴のように思う。

小泉信三について、慶応大学の月刊誌「三田評論」1月号の特集「元塾長小泉信三を語る」で、小泉妙さん、神吉創二氏、清家篤塾長が鼎談された。小泉信三が戦後、一切の公職に就かず東宮教育参与だけを引き受けた事を神吉氏が「推測ですが自

身の息子を喪い塾生を喪った塾長として、戦争で亡くなった若者の無念を、若い東宮様に何とか担っていただきたいと言っ願ひ、並々ならぬ概・・・」清家篤塾長は「終戦後、いろいろな形で言論活動をされ、何よりも今の皇室をしっかりと後世に伝えると言う事について、心を砕かれた・・・」

日本中が夢中になった「ミッチーブーム」を思い返す人は多いだろう。昭和31年経済企画庁が「もはや戦後ではない」と結語し、今上天皇のご成婚は昭和34年4月、日本中が喜びに湧き返った。皇太子妃美智子様(當時)の一挙手一投足が週刊誌に溢れた。今年正月BS朝日「皇室スペシャル」ご成婚55年」の中でNHK朝ドラ「おしん」の脚本家、橋田壽賀子氏が「自分はそれまで戦争との関わりから皇室に対して、複雑な気持ちを持っていたが、このご成婚で、日本の皇室は変わって行くのだな、と思つた。」と語つた。ご成婚を決定する会議の最後の質問は小泉信三の「正田美智子嬢は、洗礼を受けていますか。」であり、その否定を待つて決定されたと聞く。「国民とともに有

る皇室」に変わっていった瞬間だ。私は皇室を戴くヨーロッパの国々を旅したが、日本の皇室ほどの畏敬と敬慕を持たれている皇室は無い。三笠と皇室には共通して、長い間ひたむきな努力を黙って重ねて来た人々の美しい成果を見る思いがする。

また慶応大学は防衛大学校と縁が深く、小泉氏の推薦で初代防衛大学校長に榎智雄元慶応大理事が就任し、松本三郎氏、現在の國分良成氏と3校長を輩出した。他大学が防大出身者に博士号を授与しなかつた時代に博士号を授与して来た。慶応大学は日吉にシステムデザインマネージメントと言う大学院を持つている。子供時代から学業不振の私どもの息子は彼が三度の飯より好きな自動車、日産に就職して以来嬉々として「ガイアの夜明け」に出、MITに飛び日産エンジニアとしてシステムデザインマネージメントに来る。好きなことを仕事とした人間の力だ。「ママ、防大を1番で出た伊藤君と一緒にだよ。おっとりとした人柄がいい。空手の名手。」2年たつと「ママ、伊藤君は最優秀論文賞をかつさらって海に帰つたよ。彼のような人が、海自のメンターに

なってくれると良いな・・・」

今年には戦後70年であり「安倍談話」

が発表される。補佐する有識者懇談会の座長代理、北岡伸一氏は元国連代表部次席大使であった。かつて彼は防大卒業式の来賓として祝辞を述べた。「日本は国連の190余国の中で皆の羨望を受けて仰ぎ見られる輝かしい国なのです。どうか皆さんはその自信と誇りを胸に活躍して下さい。」・小原台の春は日差しがきらきらと眩しかった。帽子を高く投げ上げた凛々しい青年達は、祝辞を胸に刻んで今、任務に全力だろう。

最後に、私は月1回の海軍兵学校74期の会に出席している。楽しく、そして学ぶ事が多い。回天の訓練中、九死に一生を得た國田公義氏が漢詩を寄せてくれた。彼は回天第11期講習員で光突撃隊として終戦を迎えた。回天の慰霊祭に創った詩だ。

「登丘停杖故人多

懷古六旬聞舊歌

烈士銘碑猶似語

献花遺族淚滂沱」

國田公義氏伝言・神奈川県漢詩連盟のホームページ有り、入会をどうぞ

「横須賀市政報告」

市議會議員・幹事 木下 憲司



横須賀市議会は、2月17日から3月25日の間、第1回定例会を開催しました。いくつかトピックスを報告します。

①自衛官OBの採用

本会議の代表質問に対して、吉田市長から「平成27年度から横須賀市役所・係長級職員として自衛官OBを採用する予定」との答弁がありました。これは、平成27年4月から、海自OBを1名(渉外等担当)、陸自OBを1名(防災担当)、合計2名の自衛隊OBを採用するというものです。4年前から市役所・災害対応の職等に自衛官OBの採用を求めてきました。このたび、自衛官OBが採用されることにより、横須賀市の危機管理体制がより充実されることを期待しています。

②東京湾要塞群 千代ヶ崎砲台・猿島砲台が国指定史跡に内定

平成26年11月、国の文化審議会は東京湾要塞群の千代ヶ崎砲台・猿島砲台を新たに国の史跡に指定するよう文科大臣に答申しました。両砲台は、明治時代に東京湾防備のために築かれた東京湾要塞群の一部で、千代ヶ崎砲台は明治28年(1895年)に、猿島砲台は明治17年(1884年)に竣工した沿岸砲台です。両砲台は、我が国の近代軍事・土木・建築技術の歴史を知る上で重要であるとの理由で、指定答申がなされたものです。なお、「国防のために建設された施設」としての史跡指定は、全国で初めてです。今年には横須賀製鉄所(軍港)開設150周年として、記念すべき年です。いずれの砲台も市の重要な近代歴史遺産として保存・活用を考えていきたいと思えます。

間もなくⅡ期8年の任期を終了します。横須賀はわが国安全保障のフロントランナーです。横須賀の防衛基盤の安定は、わが国の安全保障に直結しています。この事実を忘れることなく、自衛隊OBとして、軸足

を定めて議員活動に邁進する所存です。来期も皆様から託された思いに応えて、精一杯努めたいと願っております。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

【参加行事等紹介】

1 館山基地部隊研修

平成26年10月10日(金)午後、土井会長以下44名の会員が横須賀の艦艇部隊と緊密に連携し運用されている館山航空基地の航空部隊を研修しました。海賊対処部隊への派遣を継続しながら、練成訓練や警戒監視、災害派遣等に従事するという部隊の業務も多忙を極める中ではありましたが、部隊の全面的なご理解とご支援を頂き、最新鋭のSH-60K艦載回転翼機部隊及び管制塔の業務並びに地上救難の現状をつぶさに見学することができました。

先の大戦において輝かしい武功を成し遂げ祖国の防衛に殉じられた海軍航空部隊や落下傘部隊の練成の地として発展した歴史的遺産を基盤にしつつ、戦後、海上自衛隊艦載航空部隊の第一線を担っている館山航空



基地の現状を理解するとともに、現役隊員を激励し藤田幸生水交會会長、川村巖館山隊友會会長、庄司兼次郎海友會會長を含め意見交換會で交流を深め、部隊研修の裾野を広げることができました。当日は、初秋の快晴の空のもと稲刈りを終えた田園風景を楽しみながら、参加者は、久里浜フェリーやJR、私有車両及び高速バスでアクアラインを経由し、片道二時間弱の移動を行い、1300に金谷港及びJR館山駅に集合の後、支援車両により館山航空基地へ到着しました。

まず、司令部庁舎へ移動し受付を終えると、日向錦次郎第21航空群司令による歓迎の挨拶に続いて、海軍航空隊や海軍陸戦隊の尚武の地としての館山航空基地にかかわる歴史や記念碑等の遺構と海上航空の現状及び今後の発展等について説明が行われました。説明の後には、海軍陸戦隊の発足と初陣にかかわる歴史的事実と記念碑に書かれた碑文の関連について参加者と群司令の間で熱心な意見交換が行われるなど、海軍航空隊の伝統を引き継ぎながら海上防衛の中核として、警戒監視、災害派遣、海賊対処派遣等幅広い任務に日夜まわい進んでいる館山航空基地の様子を理解することができました。

部隊研修は、航空機、管制塔、地上救難班、資料館見学等、部隊の指示により班ごとに移動し行われました。最新のSH-60Kの説明に際しては、女性操縦士である林2尉も加わっていたいただき、海上自衛隊における女性の活躍と役割の着実な拡大を印象付けられ、記念写真に納まる参加者も数多く見受けられました。管制塔の見学では、館山湾を見渡しつつ航空安全と救難に備え管制に従事す

る隊員の張り詰めた空気を肌で感じながら、当直中のそれぞれの隊員が担っている管制要領を分り易く説明していただきました。

最新の消防救難設備を有する地上救難の要領等について細部にわたり研修でき、部隊の士気と術科練度の高さに改めて感銘を受けることができました。資料館の見学では、黎明期における海軍航空隊の時代から、戦時中、更には、現在に至る歴史的な経過が一般の方々にも分りやすく展示されており参考になりました。



基地周辺には防空壕や格納庫等の旧海軍関連の施設跡も数多く残されており、若干時間も足りないような気がして、もう一度時間をとって見たいと感じました。

部隊研修後、会場を幹部食堂に移し意見交換會が和氣藹々とした雰囲気の中で行われ隊員の皆さんを激励するとともに友好団体の皆さんとも交流を深めることができました。土井会長からは、部隊研修をさせていただいたお礼の言葉とともに、特に、艦載回転翼機開発に際して艦艇部隊と航空機部隊が熱のこもった議論を繰り返しながら現在の装備に至っている経緯も披露され、横須賀水交會が館山航空基地を研修する意義を強調されました。日向群司令からは、艦艇部隊のOBを主たる会員とする横須賀水交會が艦載回転翼航空機部隊を研修することを大歓迎するお言葉を頂きました。

引き続き、今回の研修でお世話になった日向群司令、司令部首席幕僚



奥田幹雄1佐、第21整備補給隊司令
与田敦夫1佐、第21航空隊司令國見
泰寛1佐、第73航空隊司令渡邊浩一
郎1佐、館山航空基地隊司令檜垣太
1佐、司令部広報室長橋本俊介1尉、
群先任伍長小瀧雅彦海曹長等、部隊
の方々並びに藤田水交會会長、川村
隊友會館山支部長、庄司海友會會長
等関連団体の長の皆様の紹介が行わ
れ、大きな拍手に包まれました。



艦載回転翼航空機部隊を育て上げ
られた藤田水交會会長の艦載航空機
開発にまつわる熱意溢れる思い出や
現在に通じる教訓とともに、現役隊
員及び横須賀水交會對する愛情溢

れる激励の言葉で乾杯が行われ懇談
に移りました。参加者は、厚生セン
タースナック「無番地」心尽くしの海
の幸とお寿司、彩り豊かなオードブ
ルを味わいながら杯を重ね、現役の
皆さんの現場での手に汗を握る体験
談に胸を躍らせるかと思えば昭和28
年当時に館山航空基地勤務を経験し
た堂元清二氏(85歳)の苦労話に熱
心に耳を傾けるなど、意見交換會は
大いに盛り上がりました。

最後に中尾誠三横須賀水交會副会
長の中締め乾杯により閉會となり
航空隊写真班にSH-60K前で撮影し
ていただいた写真を記念に頂くなど
現役の皆さんとエールを交換しなが
ら支援車両で館山航空基地を後に無
事に研修を終えました。

横須賀水交會は、平成24年度の護
衛艦「ひゅうが」体験航海138名
(男性115名、女性23名)、平成25
年度厚木研修67名(男性61名、女性
6名)、平成26年度館山研修44名(男
性35名、女性9名)参加という部隊
研修の実績を踏まえ、いずれも興味
深い部隊研修を実施することにより
約半数を占める有志会員等の方々が、
参加してみようという根強い動機付

けになつていると考えています。
今後とも、横須賀地区所在の海上
自衛隊部隊を激励するという横須賀
水交會としての軸足を維持しつつ、
更に魅力的な部隊研修を引き続き追
及し会の活性化と魅力化を図ってい
くこととしています。

(安齊 勉幹事記)

2 第29回ゴルフコンペ

平成26年11月7日(金)、第29回
横須賀水交會主催ゴルフコンペを千
葉房総半島の鹿野山カントリー倶楽
部にて開催しました。

当日は、快晴、絶好のゴルフ日和
に恵まれました。参加者は土井会長
以下49名と前回よりもやや少ない人
数でしたが、JANAFから4名、
民間から2名の女性参加者を得て、
にぎやかにプレイを楽しむことがで
きました。

競技は従来どおり新ペリア方式で
実施しています。ただし、同じ人が
続けて入賞しないように、過去3回
のコンペで1、2、3位に入賞した
方は、新ペリア方式で出てきたハン
ディキャップからそれぞれ30、20、
10%を減点することになっています。

この減点は3回コンペに参加しない
と消えません。

今回は近藤義美氏が、グロス76、
ハンディキャップ4.3、ネット71.7で優
勝、2位には縣芳光氏(88、15.6、72.4)
3位 平田健氏(91、18、73)とい
う成績でした。



優勝の近藤氏は、今回で優勝6回
目の強者で、見事に副賞のキャディ
バックを獲得し大喜びでした。また、
縣氏も本来の実力を遺憾なく発揮さ
れ準優勝、副賞のパターを獲得され
ました。

ベストグロス賞には、ジュニア(65歳未満)の部では、大津正紀氏がグロス81、シニアの部(65歳以上)では、今回優勝の近藤義美氏がグロス76でそれぞれ受賞、加えて近藤氏(78歳)は前回に引き続きエイジシューートの偉業を達成されました。

優勝されました近藤氏からは「優勝できるとは思ってもおりませんでした。一緒に廻っていた方に恵まれ、優勝をさせていただきました。」との控えめのメッセージをいただきました。

水交會主催コンペは原則として会員の親睦を目的としたゴルフ大会ですが、水交會会員のみなならず、陸海空自衛隊のOBや他の自衛隊協力団体の方、そしてその友人・知人・家族まで幅を広げて参加者を募り、水交會の活動に理解を深めていただければ幸いと思っています。またこの中から水交會に入会していただければこのコンペの目的を十分に果たすことができるものと考えています。たくさんの方に声をかけて参加者を増やしていただくよう今後とも協力よろしく願います。

(迫 幸一郎幹事 記)

3 初任海曹課程学生への水交會紹介活動

会長 土井克彦

横須賀水交會では、現役隊員の水交會對する認識を深める活動の一環として、横須賀地方総監のご理解と横須賀教育隊司令のご配慮の下、平成26年12月12日横須賀教育隊で修業真近の第121期初任海曹課程学生190名(男性123名、女性67名)に対し横須賀水交會の現状と活動状況の説明会を実施しました。



その背景には、現役隊員、別けても海曹士隊員の間で水交會對する

関心が希薄で、退職時水交會への入会希望者が殆ど皆無に近い現状への危機感が有ります。確かに従来から退職間近の海曹出身隊員を対象とする中級管理講習において一応の水交會紹介を行っては来たものの、隊友会等他の諸団体と横並びで通り一遍の紹介に留まり、今一つインパクトの有るものとなっていないかったことへの反省が有ります。

そこで本会では、常日頃から現役隊員へ水交會の存在を知らしめる働き掛けを図ることとし、昨年から教育隊修業式での優等生への表彰状授与、近々には横須賀水交會のポスターを部隊掲示する等の施策を進めております。今回の初任海曹課程学生への水交會紹介活動も又その一環を成すもので有り、今後恒常的に実施して行く計画としております。

今次講話の講師には、昨年入会頂いた元自衛艦隊先任伍長の下湯瀬健徳常務幹事と前横須賀地方隊先任伍長の高橋進常務幹事に当たって貰い、筆者も陪席しました。

両幹事の講話は、軽妙洒脱な語り口の中に水交會の存在意義を明確に示し、特に自らの体験に基づいた「海

曹士から見た水交會」の講話内容は秀逸で、聴講者に深い感銘を与えるものでありました。従来その生い立ちからか、ともすれば水交會は幹部出身者の親睦会的色合いで見られ、それが海曹出身会員の入会を阻害して来た側面は否めません。今回の講話内容は、優れてその壁を破る効果を生んだものと見られます。講話後の懇談でも学生達は講師を身近な存在として捉え、海曹としての部隊勤務の在り方論等多岐に亙る質疑が成され、極めて有意義なものとなりました。

この種講話は、得てして水交會への入会勧誘の色合いが強く一方通行に成りがちで、逆に拒否反応を誘因するケースが見られますが、媚びること無く相手の立場に立った説論は見事で、今後の水交會紹介活動の典型に成るものと感じました。

当該初任海曹課程学生は、昨年12月19日に修業を迎え全国の部隊へ巣立って行きました。彼らの部隊での活躍と、併せて今回の講話と修業時の横須賀水交會からの優等生表彰の効果相俟って、彼らを通じて水交會の存在認識が全国の各部隊隊員間

で高まることを念じつつ横須賀教育隊を後にしました。
終わりに、海曹出身会員の多方面に互る活躍に大いなる敬意を表するとともに、余りに過負荷とならぬよう十分自戒して共に今後の会務運営に励むことを申し添えて、最初の初任海曹課程学生への水交會紹介活動の報告とします。

4 横須賀地区防衛諸団体 賀詞交歓會

横須賀地区防衛諸団体による恒例の新年賀詞交歓會が1月18日(日)の午後、横須賀商工会議所多目的ホールにおいて開催されました。

本会は防衛関連の9団体が共催し横須賀地区に在籍する陸・海・空自衛隊の部隊指揮官・先任伍長、米海軍部隊指揮官、横須賀市長等を招いて新年の賀詞を交歓するとともに自衛隊員を激励し、併せて各団体会員相互の親睦を図ることを目的として毎年実施されているものです。
当日は好天にも恵まれ来賓を含め約300名の参加者が得られ、盛大に実施することができました。
式典は国家斉唱に始まり、共催団

体を代表しての小山満之助横須賀防衛協会会長の挨拶、来賓祝辞の順で進行了ました。



小山会長の挨拶では、昨今の我が国を取り巻く厳しい内外情勢に対する自民党安倍政権の経済・安全保障政策を高く評価するとともに自衛隊の実動を伴う諸活動を賞賛し、防衛諸団体として今後ともその支援に全力を傾けるとの意思表示が成されました。

来賓祝辞では、吉田雄人横須賀市長からは米海軍の空母「ジョージワシントン」の交代やイージス艦増強

等を例に採り横須賀が我が国安全保障の要に位置するとの認識から、今後とも自衛隊・米海軍との連携を深めることの重要性が語られ、現役



を代表しての鮎田自衛艦隊司令官からは昼夜を分かつ海外で実任務に就いている現状が紹介され、今後とも全身全霊を持って国民の負託に込めて行くとの決意が示されました。



来賓紹介では、自衛隊部隊指揮官、米海軍部隊指揮官、防衛大学校長等の紹介に引き続き、小泉進次郎内閣府政務官からは地方創生と共に安全保障政策推進に力を注ぐとの意思表示

明が有り、佐藤正久参議院議員からは自民党国防部長として集団安全保障政策の法整備等自衛隊の活動環



境の整備に努めること、宇都隆史外務政務官からは同盟国との安全保障面での一層の連携強化を図るとの強い挨拶が有りました。



その他地区選出の神奈川県議会議員、横須賀市議会議員等が紹介され本会の盛況ぶりを窺うことができました。
祝電披露を挟んでの恒例の鏡開きでは各界を代表する方々(小泉衆議院議員、佐藤参議院議員、宇都参議院議員、吉田市長、板橋市議会議員、平松商工会議所会頭、小山防衛協会

会長、國分防衛大学校校長、クラブト在日米海軍司令官、鮎田自衛艦隊司令官、成田通信学校長、中出口上曹会会長)が参加者全員の「ヨイシヨ」の掛け声に合わせて2個の四斗樽を見事に開き、会の雰囲気はいやが上にも盛り上がり、その後の國分防衛大校長の乾杯の音頭で祝宴に移りました。



会場内は熱気に包まれ随所で新年を寿ぐ歓談の輪が広がり、参加者の交歓と親睦更には自衛隊員の激励という所期の目的を十分達成できたも

のと思われず。最後に空自の長谷川第2高射隊長の万歳三唱で会が締められ、平成27年の賀詞交歓会を滞り無く終了することができました。

(宮崎道夫幹事 記)

4 第6護衛隊「たかなみ」、「おおなみ」帰国迎え

1月24日(土)、ソマリア沖及びアデン湾において、第19次海賊対処活動に従事していた部隊(指揮官 第6護衛隊司令 大川努1佐)の護衛艦「たかなみ」(艦長 上田裕司2佐)と同「おおなみ」(艦長 加世田孝行2佐)が任務を終えて、横須賀に入港帰国しました。昨年7月出港、8月上旬から、現地で護衛活動を行い、任務を終了し、「はるさめ」及び「あまぎり」と交代し、この度帰国したものです。

帰国途次、1月3日から9日には、国際緊急援助隊として、インドネシア・カリマンタン島沖で墜落したとみられるエアアジア航空機の捜索にあたり、4人の遺体を収容したため、当初計画より1週間遅い帰国となりました。

井上横須賀地方総監執行による帰

国行事には、原田憲治防衛大臣政務官、日本船主協会関係者、鮎田自衛艦隊司令官ほか各部隊指揮官、隊員、家族など多数が参列しました。横須賀水交会も土井会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えました。

司令帰国報告、大臣政務官訓示、自衛艦隊司令官訓示、来賓紹介などの行事は整齊と進められました。両艦乗員の逞しく、凛々しい態度は、任務を完了した誇りに満ちており、頼もしいものであります。



公表された資料によると、平成26年十二月末現在、第20次派遣海賊対処行動水上部隊までの累計護衛実績は約3500隻に及んでいます。また、ゾーンデフェンスが行われ、累計280日、確認した商船数約8000隻におよび、その成果は国際的にも高く評価され、関係船舶からは格別の感謝をされています。

海賊対処は、長期間にわたる任務遂行であり、厳しい環境条件のもとでの緊張は計り知れないことと考えます。国際的な責務を果たし、国益に寄与した指揮官及び乗員各位に対して、深甚の感謝と敬意を払います。乗組員の皆様には、短期間かと思いますが、休養され英気を養ってくださいよう願います。

(本多一雄事務局長 記)

5 緊急登庁時保育担当者養成講習への参加

2月19日(木)、横須賀地方総監部において緊急登庁時保育担当予定者の養成講習が実施されました。

講習には、緊急登庁時に隊員とともに登庁した子弟の保育主担当部隊となる横須賀基地業務隊厚生課長等



を始めとする横須賀地方隊に所属する女性自衛官及び女性事務官約20数名の他、横須賀水交會から、オブザーバーとして土井会長をはじめファミリーサポート提供会員に登録されている会員・会員夫人及び担当常務幹事等の約20数名が参加しました。

本講習会は、預かった子供達を育てるために、横須賀地方総監部厚生課が中心となって横須賀市関係者と調整の上開催されたものです。

講習内容は、「子供の事故と病気」、「子供の発達と事故防止」、「子供の発達と保護者の対応」、「子供との接し方（乳幼児、幼児、小学生）」、「食事と栄養」及び「健康管理」についてであり、講師は、横須賀市の子ども健康課の小児科医や同保育運営課の保育士及び栄養士並びに学童指導員等でありました。

横須賀地方総監部が想定している緊急登庁支援時における保育対象は、幼児から小学生までと幅が広い。幼児に関する内容にやや偏重したきらいはありましたが、横須賀水交會の登録会員が対象とする小学生に関する講習では、学童指導員による経験や元にした多くの子供たちの生活環境や心の移り変わりなど大人では知り得ない貴重な話を聞くことができ、また、なかでも「我々大人は自分の物差しで出来事を判断し、子どもを間違った道に進まないように導いているように見えるが、実は大人の勝手な思い込みで、厄介な出来事になると面倒だから叱って思い通りにさせている。」という言葉には考えさせられるものがありました。

横須賀水交會は、現在緊急登庁支援について検討を重ねており、昨年末の幹事会においてファミリーサポートセンター開設の承認を得、今次講習参加もその準備の一環を成すもので、まずは支援活動の第一歩を踏み出したものと認識しております。

横須賀地区に在隊する海自部隊の特性として、隊員の多くが他県出身者であることから緊急登庁時に自宅に残す子供達の世話を親族に頼ることができない現状があり、その支援策については早急に整備しなければならぬ状況にあります。

このような状況に鑑み、横須賀水交會としては、総会の議決を待たずフライングではとの批判は重々承知の上で横須賀地方総監部と緊密に調整・連携を計りつつ、隊員相互の自助努力でも叶わない隊員の児童を対象として、それへの支援の手を差し伸べ、隊員が後顧の憂い無く職務に専心できる環境整備に貢献すべく横須賀水交會ファミリーサポートセンターの一日も早い開設を目指しております。

現在横須賀水交會会員及びその家族の皆様の横須賀水交會ファミリー

サポートセンター提供会員への登録は、未だ二十名に留まっております。引き続き登録を受け付けておりますので一人でも多くの会員の方々の申し込みをお待ちしております

(高橋 進幹事記)

▼16面「ファミリーサポートセンター会員の募集」

6 「護衛艦「ひゅうが」舞鶴転籍見送り」

3月14日(土)、護衛艦「ひゅうが」(艦長・岡田岳司1佐、乗組員約380名)は舞鶴転籍のため横須賀を出港しました。



「ひゅうが」は平成16年度計画の海上自衛隊最大(当時)の護衛艦として建造され、平成21年3月の竣工と同時に、第1護衛隊群に編入された後、約6年間にわたり横須賀を母港として様々な任務に従事してきました。その間、優れたヘリコプター運用能力、指揮通信能力及び物資輸送能力をいかに発揮し、東日本大震災における災害派遣活動をはじめとしておおいに活躍してきましたが、このたび、22年度計画艦「いずも」の横須賀配備に伴い、舞鶴へ転籍することとなったものです。

出港行事には井上横須賀地方総監、河村護衛艦隊司令官をはじめ各級指揮官、隊員、乗員家族、防衛関係諸団体関係者など多くの方々が逸見岸壁に集まりました。

横須賀水交會も、土井会長はじめ、多数の会員が自衛艦旗小旗及び水交會旗を振って見送りました。

巨艦が離岸し、ゆっくり回頭しつつ、別れの帽振れを実施しながら粛々と出港していく姿は見ごたえのある場面でした。「ひゅうが」のますますのご活躍とご健闘を祈念します。

(本多一雄事務局長 記)



7 第1護衛隊「むらさめ」、「いかづち」ソマリア沖・アデン湾へ
3月18日(水)、海賊対処法に基づき、ソマリア沖・アデン湾において、海賊対処に任ずる第21次水上部隊として、第1護衛隊司令 中筋篤志1佐を指揮官(司令部約30名)に護衛艦「むらさめ」(艦長 藤井健志2佐、乗組員約170名)と「いかづち」(艦長 外園和治2佐 乗組員約180名)の2隻が、横須賀を出港し、第20次隊の「はるさめ」及び「あまざり」と交代する予定で現地へ向いました。

井上横須賀地方総監執行の出港行事は、石川博崇防衛大臣政務官訓示、鮎田自衛艦隊司令官訓示、船主協会からの花束贈呈、第1護衛隊司令あいさつの順で実施されました。

吉倉岸壁には横須賀市長代理副市長、船主協会関係者、海上保安庁関係者、各級指揮官、隊員、家族、防衛団体関係者、地元関係者など多数が参加して盛大な見送りが行われました。

横須賀水交會も土井会長はじめ多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交會旗を掲げ、派遣部隊の壮途を祝いました。

「むらさめ」、「いかづち」両艦は、横須賀音楽隊の演奏の中、スマートに離岸し、帽振れに合わせて振られた各団体の激励旗や大きな声援に送られ出港していききました。

公表資料(3月13日付)によると、2月末現在までの累計護衛実績は3,522隻に、また、平成25年12月10日から開始されたゾーンデフェンスでは、累計331日、確認した商船数約9,490隻に及び、その成果は国際的にも高く評価され、関係船舶からは格別の感謝をされています。



海上交通路の安全ひいては、国益のため、長期にわたり厳しい環境条件において、時として危険を伴い、任務を遂行する部隊に対し心からの敬意と感謝を捧げ、武運長久と任務達成を祈ります!

(宮崎道夫幹事 記)

8 掃海艇「はつしま」就役、

初度入港歓迎行事

3月19日(木)、JMU(ジャパンマリンユナイテッド(株))横浜事業所鶴見工場において、平成23年度計画中型掃海艇「はつしま」の引渡し

式及び自衛艦旗授与式が執り行われました。

この艇は、船体にGFRPを使用した「えのしま」型掃海艇の3番艇で、排水量、全長等は既就役艇と変わりませんが、掃海艇としては初めてとなる20ミリ遠隔管制砲及び衛星通信装置を搭載しています。



式典は、防衛省及び建造所関係者等多くの参列者を得て、厳肅かつ整齐と行われました。まず会社側から防衛省へ「はつしま」の引渡しが行われ、「はつしま」マスト上のJMU社旗が降下されました。引き続き、井上力横須賀地方総監から鈴木厚志

艇長へ自衛艦旗が授与されました。横須賀音楽隊の奏でる軍艦行進曲にあわせ、自衛艦旗を掲げた先任士官を先頭に乗組員総員が乗艇し、国歌「君が代」の演奏と共に自衛艦旗が艦尾旗竿に掲揚され、ここに自衛艦「はつしま」が誕生し、横須賀地方隊第41掃海隊に編入されました。

祝賀会終了後、出港式が行われ、造船所側から艇長及び海曹士代表に花束贈呈、引き続き鈴木艇長から、『われわれ乗員一同は、最強の装備を持つ掃海艇の乗員として、その能力を全力發揮すべく全身全霊をかけた職務に邁進する所存であります。』との挨拶がありました。

その後、横須賀水交會会員をはじめ、多くの式典参列者の自衛艦旗及びJMU社旗の小旗が打ち振られる中、配備先である母港横須賀に向かって雄々しく出港しました。

その後、横須賀音楽隊が歓迎の曲を奏でる中、風と雨の手荒い歓迎を受けながら、「はつしま」は威風堂々と逸見岸壁に入港しました。横須賀水交會からは道家幹事長をはじめ多数の会員が横須賀初入港を歓迎するとともに乗員の激励を行いました。

井上横須賀地方総監執行による入港歓迎行事は、横須賀在籍の各級部隊指揮官及び隊員、吉田雄人横須賀市長はじめ地元各界の代表、横須賀水交會などの防衛諸団体の代表及び会員が参列して行われました。



はじめに鈴木艇長が井上総監に入港報告、続いて横須賀市長から、『「はつしま」の入港を心から歓迎します。4年前の震災での掃海部隊の活躍には横須賀市民の多くが感動し、信頼を寄せました。今後益々の活躍を期待します。』との歓迎の言葉があり、その後艇長及び乗組員代表へ花束が贈呈されました。最後に鈴木艇長の

お礼の挨拶があり、その中で、『乗員一同「はつしま」の全能力を發揮できるよう各種訓練を積み重ね、皆様の期待に応えられるよう専心職務に邁進します。』との心強い決意が表明されました。

入港行事のあと参列者に艇内が公開され、多くの人たちが艇内を見学しました。

今後、就役訓練を経て掃海部隊の第一線で活躍することになる掃海艇「はつしま」の武運長久をお祈ります。

(松本幸一郎幹事 記)

9 護衛艦「いずも」横須賀

初度入港歓迎行事

3月26日(木)、護衛艦「いずも」(艦長 吉野敦1等海佐)が横須賀に初入港しました。

この護衛艦は、「いずも」型護衛艦の1番艦として建造され、基準排水量19,500トン、長さ248m、幅38m、深さ23.5mで、ヘリコプター5機が同時に発着艦でき、9機を同時に運用、約14機を搭載できる能力があります。また洋上司令部機能、洋上給油機能を有するほか、手



術室や35名分の病床など洋上医療能力も強化されています。さらに、乗組員約470名とは別に約450名が長期滞在できる設備もある、海上自衛隊最大の艦艇です。

同艦は3月25日に、ジャパン・マリユニテッド(株)横浜事業所磯子工場で防衛省へ引き渡され、中谷元防衛大臣から自衛艦旗を授与され就役し、第1護衛隊群に編入され、このたび定係港となる横須賀に初入港したものです。

逸見岸壁には海上自衛隊各級部隊指揮官及び隊員、米海軍関係者、田神横須賀市副市長、市議、市民並びに防衛諸団体関係者等、多くの地元関係者が参列し、横須賀水交会からも本多副会長をはじめ約40名の会員が自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えました。

歓迎行事で、今回、特に目を引いたのは艦名である「いずも」にゆかりの方々が多く参列したことです。はるばる島根県から「出雲大社」の千家尊祐(たかまさ)宮司をはじめ、島根県知事代理、出雲市長、浜田市長代理、飯南町長、出雲商工会議所会頭等多くの方が、横須賀まで足を運び、共に「いずも」の横須賀入港を祝ってくださったことは、「いずも」という名称の重みと、同艦のこれからの活躍に大きな期待が寄せられている表れであるものと感じました。

井上横須賀地方総監執行による入港歓迎行事は、吉野艦長の入港報告、田神副市長の歓迎の辞、花束贈呈、来賓紹介、艦長挨拶の順で実施されました。田神副市長からは「入港を心から歓迎するとともに、隊員及び家族が安心して働けるように、横須

賀市として支援します。」という暖かい歓迎の言葉が述べられました。吉野艦長からはお礼の言葉とともに「これから洋上司司令部としての高い指揮通信能力、ヘルコプター運用中枢艦としての能力を活かし、災害派遣や国際緊急援助活動等の期待にも応えられるよう、訓練を積んでいきますが、生まれたばかりであり、まずは温かい目で見守っていただきたいと思います。」という決意が述べられました。



入港行事のあと参列者に艇内が公開されました。見学者はグループ別に分かれ、「いずも」の乗員の方々に案内され懇切丁寧な説明を聞くことにより、同艦の優れた能力の一端がうかがい知ることができました。



本艦は極めて注目を浴びる存在であるため、これから就役訓練の他、一般公開等広報関連の行事も通常の艦艇に比して多いのではと考えられ乗員の方は多忙になり大変であると思いますが、早期に戦力化され、おおいに活躍されることを期待します。

(宮崎道夫幹事 記)

【トピックス】

1 平成26年第2回幹事会

平成26年12月6日、横須賀地方総監部の会議室において第2回幹事会が行われ、顧問以下40余名が参加しました。

実施成果としては、館山航空基地部隊研修、ゴルフコンペについての報告がありました。実施予定としては、平成27年の新年賀詞交歓会実施要領と今後の横須賀教育隊の修業式における横須賀水交会会長からの激励賞についての報告がありました。

また、隊員留守家族支援（ファミリーサポートセンター）参加者募集、馬門山海軍墓地の保存に関する組織設立の検討内容、部隊に対する横須賀水交会の存在をPRするためのポスター配布の紹介等について議論が行われました。



会議終了後、よこすか平安閣において、忘年会を兼ねた懇親会が、田神横須賀市副市長、井上横須賀地方総監、中西横須賀地方総監部幕僚長及び関横須賀地方隊前任伍長をお招きして行われました。



野口総務幹事の司会の下、土井会長の挨拶、田神副市長と井上横総監の挨拶、佐藤正久参議院議員からの祝電の紹介の後、松崎顧問の音頭で乾杯を行い、懇談に入りました。途中、各同好会（カード、ゴルフ、卓球）への活動支援金の贈呈が行われるなど和気藹々のうちに、長崎顧問の音頭による来年の飛躍を期した万歳三唱をもって、閉会となりました。

2 靖国神社等月例参拝

今年最初の月例参拝は2月19日(木)に実施されました。旧海軍出身者は兵学校73期の佐藤精一氏以下、甲飛会の方々9名で、海自OBは幹候4期の與世田勉氏以下クラス代表18名、電子会1名、有志会員2名及び水交会本部4名の合計34名でした。さらに横須賀水交会からの参加者に加え総勢51名での参拝となりました。

当日は風穏やかな晴天で、旧暦の正月2日の春の気配を感じながら大変恵まれた参拝となりました。



靖国神社においては徳川宮司から旧正月の季節の話をいただきましたが、最後に「横須賀からの参加の月には人数がそろってうれしく、また

今回は特に女性が多く参加していただきありがたい。」と付け加えられました。



千鳥が淵戦没者墓苑では尾崎墓苑奉仕会常務理事等の出迎えを受け、最近の慰霊参拝等の状況説明をしていただきました。ガダルカナルで収集された遺骨を練習艦隊が昨年、始めて輸送したことや天皇皇后両陛下の「パラオ」の慰霊の意向が報道され、遺骨収集や慰霊に世の注目が少し高まり、宇都議員等による活躍により遺骨収集の機運が高まっているように思われますが、残された遺骨収集の難しさ等から、道は険しいとの報告がありました。

なお、昨年1月からの実績は1274柱であるが、戦没者240万人の内、帰還は127万、海没30万の他、種々の国情から収集困難の御柱が27万あり、残る55万8千の遺骨収集が目標であるとのことでした。お話を伺った後、各自、生花を手向けお祈りをしました。



続いて防衛省へ向かい、海幕総務部長、わだつみ会会長に出迎えられ、殉職自衛隊員慰霊碑の前で幹候4期の與世田先輩が代表して献花し慰霊参拝を行いました。

平成26年度の顕彰は11柱(内訳：陸自8柱、海自3柱)であり、累計

(警察予備隊)平成26年度追悼式) 1,851柱(陸自1,018柱、海自405柱、空自403柱、その他25柱)であるとのことでした。



その後、参加者全員が水交會本部に移動し、佝顧問の乾杯の挨拶で直會を開始しました。鍋が暖まる間、日本が戦後処理で大変お世話になった人物、J・R・ジャヤワルダ氏の紹介がありました。氏は、サンフランシスコ講和會議において我が国に分割占領制裁から、仏陀の「怨みに怨みをもつても人は恩まれない。」また「多くのアジアの人々は日本による解放を喜んでいゝ。」等としてアジアの思いで戦勝国の説得に尽

力頂いた元スリランカ大統領(当時蔵相)であり、この恩義に感謝すると共に靖國の英霊の思いと重ね、水交會鍋祭の直會はますます熱いものとなりました。

いつまでも話は尽きませんでした。次回6月月例参拝での再會を約して各々家路に着きました。

3 平成26年度第3回幹事會

3月11日(水)横須賀市総合福祉會館視聽覺研修室において平成26年度第3回幹事會が行われ、會長以下40余名が参加しました。今回は講演會と幹事會の2部構成で実施されました。

まず講演會は「ジブラルタ生命東京營業本部 チーフインストラクター 一佐野元様を講師に迎え、「相続税対策」と題した演題で実施されました。

内容は、普段はあまり縁がないと考へているにもかかわらず、誰しもが多かれ少なかれ直面することになる「相続税」という問題について具体的な事例を挙げながら平易に解説された非常に参考になる講演でした。

次に、幹事會では、27年1月以降に実施された活動である「賀詞交歓

會」及び「靖國神社月例参拝」についての報告と、これから總會に至るまでの間に実施される予定の「馬門山海軍墓地墓前祭」、「海軍の碑記念行事」、「教育隊終業式における激励」及び「浜空鎮魂の碑慰霊祭」の実施要領等について、それぞれの担当業務幹事から説明がありました。



休憩を挟み、「隊員留守家族支援」に関する進捗状況、27年度總會での議案(26年度活動報告、27年度活動計画等)等について、担当業務幹事から説明がありました。

いずれの案件についても、参加者から今後の活動も視野に入れた活発

な意見がだされ、熱の帯びた討論が実施されました。



会議終了後は、さいか屋横須賀新館2階の「煌蘭」に場所を移し懇親会が実施されました。懇親会に先立って、4年前の3月11日に発生した「東日本大震災」で亡くなられた方々、2月3日に南極において亡くなられた「しらせ」補給長、2月12日に殉職された第211教育飛行隊所属ヘリコプター搭乗員の方々等のご冥福を祈り黙とうを捧げました。野口総務幹事の司会の下、土井会長の挨拶、松崎顧問の発声による乾杯で始まった懇親会は途中で来年度

役員を紹介をはさみつつ、いつものごとく大いに盛り上がる内に、来年度会長予定の中尾副会長の音頭により中締め乾杯をもって閉会となりました。

【お知らせ】

1 ファミリーサポートセンター
会員の募集

横須賀水交會ではファミリーサポートセンターの会員を募集しております。詳細は横須賀水交會ホームページをご覧ください。趣旨に賛同される方は次の担当常務幹事のいずれかにご連絡ください。皆様の連絡をお待ちしております。

- 加藤保幹事：090-4248-4829
- 山口透幹事：090-1694-2690
- 高橋進幹事：080-5083-2933

2 戦艦「陸奥」主砲の横須賀里帰り
運動支援募金

横須賀水交會は陸奥主砲の横須賀への里帰り事業に対する協力支援をしております。移転・設置のための資金を「陸奥の会」が募金しておりますので、会員各位のご協力、ご支援をお願いします。なお、募金は次

の金融機関への振込でお願いします。「かながわ信用金庫本店営業部」

- 支店番号：001
- 口座番号：普通 1636554
- 口座名義：陸奥の会代表 齋藤隆
- 「湘南信用金庫本店営業部」
- 支店番号：001
- 口座番号：普通 1465156
- 口座名義：陸奥の会代表 齊藤隆

訃報

昨年11月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。(敬称略)

- 広瀬二三男 平成26年11月20日
 - 吉村 英男 平成26年11月22日
 - 沖 為雄 平成26年12月19日
 - 初谷 知男 平成27年3月8日
 - 宮森 通 平成27年3月19日
- (本多一雄事務局長記)

新(編)入会員

(26年10月〜27年2月)
次の方々横須賀水交會に新たに入会(編入)されました。(敬称略)

- 山田昌範(有志) 井上光典(有志)
- 羽柴晃一(有志) 五島浩司(幹候32)

屋敷央(有志) 山田勝規(幹候32)
渡部辰己(有志) 田中亮二(幹候33)
森努(有志) 白銀二郎(有志) 大島互(横練195) 橋本浩彰(横練195) 山口

- 眞二(有志) 長谷川和弘(曹候14) 島田和久(有志) 北村哲也(有志) 市川幸彦(有志) 中野博人(有志) 小田島建夫(有志) 瀬野雄二(幹候29)
- (高橋陽一幹事記)

【編集後記】

靖國神社月例参拝の記事中に「ジヤワルダナ」氏に関する紹介がありました。編集子は恥ずかしながら、このような方の存在を全く存じ上げていませんでした。終戦直後にわが国のために尽力された外国の方という、すぐに東京裁判のパール判事を思い浮かべることができずが、このように日本の為に尽力された外国の方を知り、そのような方々に対する感謝と尊敬の念をいつまでも忘れないようにしなければと改めて思った次第です。他にもこのような方についてのエピソードを、ご存じの方は本紙に是非ともご寄稿いただくようお願いいたします。

(編集担当) 宮崎